

Title	曾我物語と二人比丘尼
Author(s)	鈴木, 亨
Citation	語文. 1958, 21, p. 25-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68527
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

曾我物語と二人比丘尼

鈴木 亨

二人比丘尼といえは、その特異な内容と流麗な文体とを以て、仮名草子の中でも既に定評のあるものであり、作者鈴木正三しんごの文名も、主として此の作によって喧伝せられたわけである。然し、此の作品が、全面的に正三の独創のみから成っているのではない事も周知の事で、既に石田元季氏らによって、一休骸骨、九相詩、一休二人比丘尼等の原拠が指摘されている。而もそれらの原拠は、この作品の趣向の主要部に於てその影響が認められるものであって、その点からいえば、この作品に於ては正三は、新しい趣向を創造する才能よりも、寧ろ古い趣向を換骨奪胎し、再組織する才能を見せたという事が出来る。

本稿は更に曾我物語を原拠の一つとして追加指摘する事によって右の事実を確認しようとするものである。又これは前記の三原拠が極めて重要な部分に関与するものではあるにしても、その影響が部分的な範囲に限られているのに対し、作品の構想全体にわたって影響が見られるという点に大きな特色を持っている。だからそれを考察する事は、同時にこの作品の構想や創作態度を考察する事でもあるわけである。

この考察は一つの思いつきに始まっている。

二人比丘尼の冒頭に、

来て少時もとまらざるは有為転変の住家、生滅を此処に定がたし。去て再び帰らざるは冥土きやくしやうの別、後悔を誰が家にかとはん。

という文章がある。この中、「二度帰らざるは冥土きやくしやうの別」などは、例の一休骸骨の中にも見られる言葉であるが、このように対句の形にまとまったものとしては、出典と見なされるものも見当らなかつたので、このように取り合わせたのは、このように取り合わせたのはやはり作者正三の創作かと思つていた。然し文章の調子が如何にも拠る所が有りそうに感じられるので、心にとめていた所、最近、曾我物語卷九の冒頭に、

来つて暫時も留らざるは有為転変の悟、去りて再度帰らざるは、冥土黄泉の別なり。

という文章がある事に気づいた。文章そのものは、厳密には同一ではないから、なお疑問の余地はあるが、同様の語句を対句にしている所、更にそれが共に冒頭に見られるという所から、正三の拠つた所は、或いは此処ではないかと思つたわけである。

そこで他にもそのような例が見当たらないかと思つて、改めて両書を読みくらべて見ると、後述の如く諸所に於てそれを発見する事が出来た。しかもそれは単に文章上の類似のみに留まらず、各場面に於ける趣向や、全体の構想の上になんで対応関係が認められたのであり、即ち比較考察を進めるに従つて、二人比丘尼の原拠としての曾我物語の存在が明らかになつて来たという次第である。

曾我物語は所謂戦記物語の中でも非常に啓蒙的態度の露骨なものであつて、その点では仮名草子とよく似た性質の文学作品であるともいえる。その故か、仮名草子時代にはよく読まれたらしく、度々刊行されている。辻講釈などによる普及は暫く論外に置くとして、今二人比丘尼の初刊を正保年中と見て、その頃までの刊行を調べて見ても、まず寛永四年（一六二七）に平仮名整版本が出、次いで正保三年（一六四六）に平仮名絵入本（丹緑本）が出てゐる。こうした再々の板行は、此の書の好評で盛に流布した事実を示すものと考へられるわけであるが、それだけ正三の目に入った可能性も多いわけである。特に正三は関ヶ原、大坂の陣にも参加したなかなか忠勇義烈の武人であり、出家後もその武人の心を失わなかつた人であるから、こうした戦記物語に対する関心も常人以上に高かつたかと思われる。しかも自らも亦著作をする人である。正三が二人比丘尼執筆以前に曾我物語を読んでいた事は、まず疑いが無いといつて良いであらう。

二人比丘尼の構想は主として曾我物語の巻十一、巻十二の両巻の構想と対応する。尤もそうはいつても、両者は話も随分違ふし、両方を読みくらべて見て一目瞭然というわけには行かない。それは正三の換骨奪胎が甚だ巧妙であつた事を示すものであつて、この曾我

物語から二人比丘尼への移行は、一休骸骨や九相詩の場合のように單純露骨なものではなく、うっかりしていると気づかずに過ぎてしまふ程自然に、巧妙に運ばれている。即ちなまの形のまゝで取入れられたのではなく、まず幾つかの要素に分解され、その各々、がみごとに消化変形された上で、別の形に再組織されているのである。だから我々もそれを追求するに當つては、分析と綜合の二過程を経て問題を追ふ必要があると思ふ。

まず分析から始めよう。二人比丘尼全篇を便宜上十段に分けて、各段の趣向乃至筋書の大要を示すと、次のようになる。（以下の丁付は、京都寺町二条上町、堤六左衛門開板の一冊本による。）

①冒頭——「ほだいの身を求めざる」（一オ）まで。

②——「心のうち杜かなしけれ」（二ウ）まで。

発端。主人公須田弥兵衛の妻が、亡夫を頻りに慕う事。亡夫の一
周忌を営む事。

③——「なく／＼宿に立帰りぬ」（七ウ）まで。

主人公の戰場訪問（一） 小家の女と語り合ひ、そこに一泊する事。

④——「しばしやすらひ侍りけり」（八オ）まで。

主人公の戰場訪問（二） 野辺の感慨に感極まる事。

⑤——「このところに立入侍りけり」（十五オ）まで。

草堂の一夜。夢にあまたの骸骨出て来り、無常を説く事。

⑥——「ねぶるが如くしてうせ給ひぬ」（十九ウ）まで。

寡婦の身の上話。とある寡婦の家に入りて、共に身の悲劇を歎き
合ふ事。寡婦の死。

⑦——「心ざしこそありがたけれ」（廿八ウ）まで。

不淨觀。寡婦の屍の七日目毎に変わりゆくを見て、深く無常を觀じ主人公出家の事。

⑧——「祈り給ふぞありがたき」(卅一ウ)まで。

僧の訓戒。出家の導師に、出家後の修行法について教訓を受ける事。

⑨——「仏の示し給ふ本意なり」(卅八オ)まで。

老比丘尼の説教。尊き老比丘尼を訪ね、種種教えを受ける事。

⑩——末尾まで。

得悟、老比丘尼の教えによりて悟り、衆生を濟度して、大往生を遂ぐる事。

以上の中、⑤が一休骸骨による趣向を持ち、⑦が九相詩に拠り、⑨が一休二人比丘尼の趣向を用いている事は、従来指摘されて来た所である。これらはそれ〴〵重要な要素であり、効果的な箇所でもあるが、なおこれだけでは部分的な要素に過ぎず、須田弥兵衛の妻の出家物語という全体の大筋は、その埒外にある事が認められよう。これらの部分的要素の意義については後述したいと思う。

次に曾我物語の分析である。二人比丘尼と関係のある箇所は、前述の如く、巻十一、巻十二の両巻に集中しているが、その中でも、関係のない章も含まれているから、(筋には関係なく、連想される故事を挙げて一章とする例は、曾我物語には特に多く、そういう章は無関係となっている。)今必要な章だけを抜き出して、二人比丘尼の場合と同様に並べて見る。曾我物語の各章はそれ〴〵単一の要素から成っていると見て良いので、これを以て分析に代え得るわけである。(数字は便宜上章を表わすものをそのまゝ用い、題もそのまゝ取った。)

卷十一

①虎曾我へ来りし事

曾我兄弟の死を聞いた虎御前は悲しみにたえず、愛人十郎の亡き跡を慕って曾我を訪れ、兄弟の母に逢う。十郎の旧居に一泊。

②母虎を具して箱根へ上りし事

兄弟の母と虎御前は、五郎の縁りの地箱根へ上り、別当に会い、互に涙をしぼる。次章にわたって別当の教訓がある。

③箱根にて仏事の事

箱根で別当の導師で兄弟の仏事が行われ、悲しみを新たにす。別当の涙ながらの説法がある。

卷十二

④虎箱根にて行別れし事

虎御前は泣く〴〵落飾する。善光寺を指して旅立つ。

⑤井出の館のあと見し事

途中、富士の裾、井出の館の跡を訪れ、兄弟奮戦の地をさまよう。

⑥手越の少将に遇ひし事

姉であり、祐経の愛人であった少将に会い、身の悲劇を嘆きあう。

⑦虎と少将と法然に逢ひ奉りし事

少将も出家し、都に法然を訪ねて法談を聴き、念仏修行に励む。

⑧母と二宮の姉大磯へ尋ね行きし事

二人は大磯の山奥に庵を結び、行いすましている。そこへ兄弟の母と姉が訪ねて来る。

⑨少将法問の事

母の求めにに応じて、少将の尼が念仏修行の要諦を説く。

④母と二宮行き別れし事

人々一心に念仏を修し、それ〴〵往生の素懐を遂げる。

さて、以下両者の趣向の対比に入るわけであるが、前述の如く、この換骨奪胎は極めて巧妙に行われているので、両者のプロットが平行して進んでいない事も多い。然しその反面、案外な枝葉末節までが忠実な対応を示している事も多いのであって、その変化と相似の二面に注意しながら検討して行きたいと思う。

先の分析表により、曾我物語の巻十一から、順を追って、対応する要素を取り出し、挙げて見よう。

まず曾我物語巻十一の①は、二人比丘尼の②と対応する。

虎御前と母との歎きが、そのまゝ、須田弥兵衛の妻の愁嘆に通ずる。たゞ二人比丘尼の方が文章が簡単なのは、二人比丘尼の方では事前の事情の説明がごく簡単な記述に留まっているのに対して、曾我物語の方では、十巻に及ぶ曾我兄弟の物語が、兄弟の死によって終結した直後であるのだから、いわばクライマックスから始まっているようなもので、比較にならないのが当然であろう。以下にも規模に於ては比較にならないような、単に趣向の上だけの対応を示す事が度々あるが、それは右の理由からは認められなければならないしそのほかにも曾我物語が長篇小説であり、二人比丘尼が短篇小説である事からも容認されるべき事だと思ふ。

又①は③とも対応する要素を持っている。虎御前が十郎の住居に独り夜を明かす所は、須田の妻が小家に一泊する所と全く同じ趣向である。見る物聞く物すべて亡夫を偲ばせぬものはない伏屋の独

り寝を、両者とも非常によく似た美文で語っている。

次に③は④と対応する。

故人の事を語り合つて泣く趣向も同一なら、余りに愛執の念深きは罪なりというような批判や反省が出るのも共通である。この批判は曾我物語では箱根の別当が出し、二人比丘尼では小家の女房が出て、主人公が応ずる形になっている。この場合も、女房の批判が別当の批判の壮大さに著しく遜色を見せるのは答めるべき事ではないであらう。

⑤は⑥に対応する。

二人比丘尼は主人公が、亡夫の一周忌を、「たつとき僧をくやう申し」て營む所から始まるのであるが、その構想のヒントは恐らくこの箱根の仏事から得ているのであらうと思われる。

次いで、曾我物語巻十二に入る。巻十二の⑦は二人比丘尼の⑧から⑨に対応する。

主人公の出家と、それに続く旅立ちの姿が共通である事はいうまでもない。なお⑧に於ける山寺の僧の訓戒は、曾我物語では巻十一の⑩と⑪にわたる別当の説法に当るものである。その内容も、二人比丘尼の方は、「あひかまへて〴〵、いたづらに月日を送り給はば、かみをそりたるしあるまじ。」「もしも心ざしある人と御聞き候はば、道の遠きをかへりみず、いづくまでもたづね行き給へ、とかく此の身を有る物と思ひ給ふべからず。」などと勇猛精進を勧め、曾我物語は「これを実の善知識となして、他念なく菩提心を起し給へ。」「かやうに思ひ切り、誠の道に入り給ひ候はゞ余念なく行じ給ひ候へよ」等と激励しているので、類似したものを認め得るようである。又、訓戒を終えていよ〴〵出発の時の様子を写し

た「細やかに教えられけり」（曾我）。「こまやかに教へていただきひけり。」（二人）の両文も、両書の僧侶の態度、或いは役割に密接な連絡がある事を暗示していると思う。

①は④と対応する。

両者の戦場訪問が対応する事は一目瞭然である。換言すれば、この箇所は最もなまのままで撰取せられた箇所である。文章もよく似た気分 of 哀愁に満ちた美文である。特にこの戦場を何処とも指定していない二人比丘尼が、やはり富士の裾野を思わせる広漠たる草原を表現している事は、看過すべきではないであろう。挿絵も此の箇所は両頁見開きの大型とし、広漠たる原野の感じを巧みに出している。

なお曾我物語では、虎御前の案内役に翁を登場せしめ、兄弟の奮戦の様を語って聞かせるが、二人比丘尼ではその趣向は⑤に於て果されている。即ち小家の女が翁の役で、主人公に、「須田弥兵衛殿とやらん、一ちんにすすみ出、おほくのかたきをほろぼし、ついにうたれさせ給ふ」等と語る所がそれである。又この戦場訪問の場で、両書共に二首の歌を並べ掲げている事は、緊密な関係を予想せずには一寸説明のつけられない一致だと思ふ。

②は⑥と対応する。

これは手越の少将と寡婦とが対応する人物である事を示すだけで十分であろう。尤も手越の少将の数奇な運命は、巻八以来の布石があつてこそその重量感を持っているので、此処に初登場した寡婦では対抗すべくもない。それを輔う為か、二人比丘尼では得意の美文調でこの寡婦の過去を語り流している。しかも此の女房が主人公と共に出家しようと誓う所などを見ると、作者は余程こうした対応関係

に気を配っているものと見なければならぬと思う。（手越の少将も、虎御前の出家に共鳴して出家する。）

③は⑧⑨に対応するものと見得る。

曾我物語の法然是、⑧の僧とも、⑨の老比丘尼とも役割の共通性を見る事が出来るが、短い章だから決定し難い。勿論こういう考察では無理に対応させてこじつけになる事は絶対に避けなければならぬ。一体、法然の思想は⑨で少将によって代弁されるのであるから、特にこれに対応者を置く必要もないわけである。又、二人比丘尼の方では、手越の少将役の女房が、出家を遂げぬ中に急死するので（九相詩の趣向を取り入れる為の変形）、益々不釣合になつたわけである。然し、出家した新比丘尼が行脚に出かける話そのものは④から⑥にかけて見られるのだから、やはり趣向の一部はつながっているわけである。

④は⑧と対応する。

⑤は一休二人比丘尼による事は既述の通りであり、それは引用関係によつても既に証明されている事であるが、草庵の描写などはやはり曾我物語に拠っていると見られる。これは二人比丘尼の方が詳細な描写を持っている例であるが、文章を対比して見れば同一趣向である事が明らかである。この対応は枝葉末節に至るまで、神経質なまでに実現されているので、後に文章を比較する時に再び取り上げる事にしよう。

⑥はやはり⑨に対応する。

法問の内容が念仏論に収斂する所が、両書共通で、もう一つの原拠である一休二人比丘尼が坐禪と公案を勧める趣旨を持っている事を思うと、この「二人比丘尼」という書名まで拝借した原拠に、そ

の最も肝要なるべき思想に於て背いているという事になる。勿論これは容易ならざる事である。そしてこれはそれだけ二人比丘尼が曾我物語と、予想以上に深い思想的連関を持っていた事を示す事実であると考えられる。元来正三は、禅僧でありながら念仏を好み、特に女人にはこれを推奨しているのであるが、それが女人を対象とするこの作品に表われた事は怪しむに足りない。そしてこゝに盛られた五種の念仏論は、全く正三独自のものであって、所謂「果眼念仏」に通ずるものである。そこまで行けば、勿論曾我物語の念仏論ともかなり個性的な差異を生ずる訳であるが、とりあえず正三は、曾我物語の法然式念仏論を是として、これと握手し、それを自らの構想に取り入れる事によって、こゝに新たな方便の書を作ったわけである。一休二人比丘尼からは、その構想のみか、部分的には一部の語句までそのままに引用したが、看話禅はもとより彼の好む所ではなく、まして、「ありと思へばなし、なしと思へばあり」というような法間は、最初から真似る意志がなかったと見たいのである。

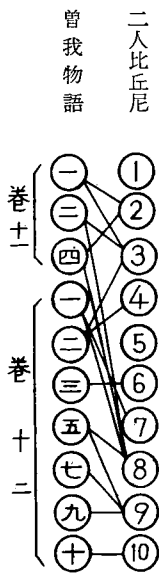
最後に④は⑩と対応する。

これも特に説明を要しないが、ただ二人比丘尼の方は得悟の状況が描かれているだけ増補になっている。悟った瞬間に、「なし／＼／＼」といって歓喜しているのは、寛永十六年八月二十八日朝、正三自身が到達した「莫妄想」の境地で、驢鞍橋に見える彼自身の体験を写したものであった。

これは彼がこの作品に並々ならぬ力を注ぎその結果にかなりの満足を感じていた事を示すものかも知れない。

以上の考察の結果をまとめて見ると、次のようになる。

(線は対応関係を示す。)



これはかなり複雑な関係である。尤もこれは、要素の分析が大きな過ぎた為でもある。然し要素を余りに微細化すると、却って煩雑にもなるし、細部と主要部との見分けも困難になる恐れがあるので、この位で一応の様子を探る事にしたのである。

以上は各部分の趣向について対応関係を見たのであるが、登場人物個々についても、同様の考察が可能である。

曾我物語卷十一十二の主人公虎御前が、二人比丘尼の主人公須田弥兵衛の妻に変身している事は今や明らかであろう。(兄弟の母の要素の時にも混入する。) 面白い事に、二人比丘尼の②に、「須田弥兵衛といふもの、二十五才にしてうちじにし、さい女十七才にして、愁嘆の涙にむせび」とあって、主人公の年齢が出ているが、これは曾我物語卷四の十一「大磯の虎思染むる事」の中に「虎といひて十七歳になりける遊君を」と見える、虎御前の年齢と一致している。尤もこれは虎御前が十郎を失った年齢ではないが、曾我物語の中で初めて虎御前を紹介する所に見える数字であり、他に彼女の年を明確に示した箇所がない事からも、最も強く印象に残る数字である事に注意したい。勿論これは偶然かも知れないから固執はしないが、面白いと思つて見れば面白い一致である。

夫の須田弥兵衛は当然曾我の十郎に当るであろう。(勿論、五郎

の要素をも含んでの見立てである。十郎討死の時の年齢は、曾我物語では廿二歳となつてゐるので、須田弥兵衛とは一致しない。然し、「ほまれを万代にのこす」とか、「須田弥兵衛どのとやらん、一ぢんにすゝみ出、おほくのかたきをほろぼし、ついにうたれさせ給ふ」等と見える所、更に前述の戦死の場所などは、正に十郎の面影を髣髴とさせるのである。

手越の少将は、卷十二②では二人比丘尼⑥の寡婦となつて登場し、④では⑥の老比丘尼となつて法間を行つてゐる。卷十一の箱根の別当は、卷十二の法然の要素を含めて二人比丘尼⑥の僧侶の役を果してゐると考えられるし、卷十二④の母や姉は、二人比丘尼⑥に於ける主人公の役である事はいうまでもない。「二人比丘尼」が正三の母の為に書かれたものとすれば、この箇所の法間を聴く主人公が、実は母親に対応してゐるという事は或いは意味深い事かも知れない。その他、卷十二②の翁が二人比丘尼⑥の小家の女に当る事などは既に触れて来た所である。

以上、ざつと両書の相似性と、換骨転化の状況とを眺めて来たのであるが、こゝで二三、具体的な文例について、より精密にその事を考へて見よう。

例一、曾我物語卷十一①と二人比丘尼③

〔曾〕さらぬだに、秋の夕は寂しきに、独伏屋の軒の月、涙に曇る折からや、折知顔の鹿の声、枕に弱る蟋蟀、軒端の萩を吹く風に、古郷思ひ知られつゝ、時しも長き夜もすがら、明しかねたる思寐の、逢ふ夢だにもなければや、片敷く闇の枕に、おきそふ露の重なれば、うつつの床も浮くばかり、明方の雁の、侶を語ひ啼く声も、羨しくぞ思ひやる。よその砧を聞くからに、

身にしむ風のいとゞしく、鐘聞く空に明けにけり。

〔二〕打ふすよひのさむしろに、おぎのうは風おとづれて、むしのなくねもかれがれに、しかのとをこゑかすかにて、おもひをそふるなかだちとなり、ゆめもむすばぬをりからに、いとゞさびしきかねのこゑ、心をくだくよもすがら、のきもる月のかげだにも、しばし枕のこらずして、更け行く空ぞかなしき、しばなく鳥のかずそひて、夜もしら／＼とあけたりければ、……。

両者の状況が対応してゐる事については既に見て来た通りであるが、文章そのものも極めてよく似たものであるが事が知られよう。こんなによく似せながら、しかも一致する句節がないのは、正三の意識的な操作であろうと思ふが、情景といふ感情といふ、全く差異を認め難い。試みに両者から共通する素材を拾つて見ると、軒、月、鹿、枕、虫、萩、風、夢、鐘、鳥、夜明けと、これだけの短文の中に十指に余るほど転がっている。これに対して、共通でない素材は、懸詞風に使われた「さむしろ」位なものである。即かず離れずというか、正三の細かい心づかいを窺わせるに足る事実であろう。こういう文章や素材は、中世以来の常套的なもので、珍しくはないという批判もあるうと思ふが、それにしても、これだけ緊密な一致は偶然とは考え難い。

例二、曾我物語卷十二④と二人比丘尼⑥

〔曾〕彼あたりなる里の翁に問ひけるは、虎御前と申せし人の、尼になりて住み給ふ所は、何処にて候ふやらんと問ひければ、あれに見え候ふ山の奥に、森の候ふ所こそ、彼人の草庵にて候へと教へければ、嬉しくも分入り見れば、実に幽なる住居に

て、垣には鳶朝顔はひかかり、軒には垣衣交の忘草、露深くして、物思ふ袖に異らず、庭には蓬生ひ繁り、鹿の臥処かどぞ見えず。

〔二〕年のよはひ、八じゆんあまりとおぼしき、こしかぐまりたるうば一人行きあひ侍りぬ。びくにの給ふやう、御身は此あたりの人なるべし、(中略)おしへにまかせて、みねに上りたりに下り、わけ行くすゑのはるくくと、道は木のはにうづまれて、岩にこけむし、それともしらぬ山べを、たづね入りて見侍るに岩のはざまに、かすかなるしば引むすぶ草のいは、わづかに事とふものとは、しづがつま木のののおと、木つたふさるのさけぶ声、峯のあらしや谷川の、いはまおちくる水の音、こととふよすがとや成ぬらん。

一見して、庵の描写、その位置環境の描写に至るまで、酷似している事がわかるが、途中で、男女の差こそあれ、老人に道を尋ねる所まで、細かく対応させてあるのである。しかも、たゞ単に似ているだけではなく、翁を媪に置き変えて変化を狙う事も忘れていないのである。これと同じ技巧が修辭の上にも見られる。即ち、曾我物語の方の、「垣には鳶朝顔はひかかり、軒には垣衣交の忘草」が、平家物語、大原御幸の事の一節である事を看破した作者は、自らもそれに対応する箇所を大原御幸からの引用で飾る事にしたわけであるが、同じ所をとらず、その直ぐ後の一節を取って、「しづがつま木のののおと、木つたふさるのさけぶ声」と応じたのである。このように此の作者は極めて神経質に対応を考えると同時に、このよな機転で変化をもたらす事も知っている。これは大きくいって、二人比丘尼の構想を曾我物語から引き出す時の原理でもあった。よ

く考えて見れば、一休骸骨や九相詩などから趣向を奪う時でも、彼は決して元のものを鵜呑みにしたのではない事がわかるのである。

以上述べて来た所で、曾我物語が二人比丘尼の原拠である事が、ほど証明されたかと思う。そして先に図示した如く、これはかなり複雑な関係であるが、九相詩や骸骨の場合と違って、作品の構想全般にわたって影響を持っている原拠であるという意味に於て、特に重要性を持つという事も認められる事と思う。

次に以上の事から、二人比丘尼を再検討して見ると、どのような問題が出て来るかを考えてみたい。まずその一つとして、此の作品の構想に見られる幾つかの不可解な点について、一応の解答が出せるものを拾って見よう。

1 二人比丘尼は正三の作品としては、最も美しくまとまっているものとして、定評があるが、幾分冗漫な点もないではない。鈴木敏也氏が、近世日本小説史に於て、③④以前の部分が冗長であると評され、⑤を第一段とした方がより緊密な構成だとされたのも、その点を衝かれたものである。確かに現代の我々から見れば、主人公の戦場訪問から直ぐに骸骨の場面へ、更に九相詩の場面を経て出家してしまふという簡潔な筋立の方が、短篇小説としてより合理的な緊密な構成であるように感じられるであろう。然し正三から見れば、彼が曾我物語を読み、そこから得た感動は、一々悉く保存し再現する価値のあるものと考えられたのであろう。曾我物語に於ては前十巻の後を承けている為に必然だった人物の配置や、趣向の連続が、その後二巻のみを再構成した二人比丘尼に於ては、大部分必然性を失っていても、それは正三の間う所ではなかつたようである。

その為に、一見無駄なシーンが続いて、今日の読者を退屈させるのである。然しそれも、曾我物語が原拠である事を考える事により、少くとも説明だけは与えられる事になるであろう。

冗長という面では、今日の読者にとって、最大の疑点となるのは⑥に於ける寡婦の身の上話であろう。なるほど劇中劇といった見方も成り立たないではなく、その位の興味はなくてもないのであるが、何といつてもこの女房は、間もなく死体となって九相を示し、主人公の出家の決意を固めさせる意味に於てのみ、存在の意義があるような人物である。それが本筋と何の關係もない、身の上話を長々とし、更には、主人公と共に出家する事を誓ったりする。この無駄もこの女房が曾我物語卷十二⑩の手越の少将に対応する人物であるからこそ、正三にとっては必要と考えられたのであろう。

2 藤岡作太郎氏は、近代小説史に於て、二人比丘尼は正三の小説としては小説らしけれど、小説としては甚だ小説らしからずと評されているが、こうした不満は、主としてこの作品の最後の四分の一を占める大規模な法問から生ずるのである。これは、それまで何とか小説らしい均整美を保って来た此の作品をして、一挙に索然たる教訓書たらしめる所であつて、実に小説としては、遺憾の意を表せざるを得ない所である。然しこれにも、少くとも説明を与える事は出来る。それは曾我物語卷十二⑩と二人比丘尼⑨との対応性から見てまず曾我物語に於ける法問の性格や規模が問題になると思う。

これは、長さに於てははるかに二人比丘尼より劣っているが、まず生死の根源から説き起して、人間論に至り、諸宗批判を経て浄土門の優越を説き、最後に念仏の廣大無辺な功德を示して終る。その構成は実に整然としたものである。しかも法然の感光を後立てにし、

きらびやかな仏典の語彙を前面に押し立てて、読者を圧倒する力は侮り難いものがある。然しこれは正三の方法ではなかった。彼は平俗な言葉で、しかも気魄を失わぬ語調で人を説伏する方法を用いていた。それは驢鞍橋や念仏草紙を見てもわかる通りである。然し二人比丘尼は曾我物語の壮大な説法に対抗する必要上、やはり生死輪廻の根本から説き起し、念仏の功德にまで説き及ばねばならなかった。彼の方法でこれをやり遂げるのは、かなり面倒な事である。それを何とかやり遂げ、更に彼の独自の論にまで展開したのだから、此の部分が著しく長大になったのは当然であつた。しかも曾我物語には長篇の利があり、二人比丘尼には短篇の不利がある。二人比丘尼がこの部分の為に均衡を失したのも、無理はなかつたといふものである。

同様な問題はなお幾つか考えられるが、この位で打ち切つて、最後に、二人比丘尼の創作過程を、以上の事から出来るだけ窺つて見たい。

二人比丘尼の創作の動機は、驢鞍橋によると、正三が自分の母に出家を勧める為に書いた事になるが、勿論一般の女性読者をも予想し、女性の為に仏教的な教化を施す為の、よりよき結縁の為の方便の書を作るのが目的であつた。其の際、正三の頭の中に浮んだ恰好なる粉本は、曾我物語末尾二巻の虎御前出家の物語であつたといふわけである。

一体、曾我物語の読者としては、正三はまことに理想的な性格を具えていたといえる。即ち武人であり、且法師ともなつた彼は、物語の武道的側面と、仏教的側面とを、共に最も深く味讀し得た筈だからである。だから、正三の曾我物語への傾倒は相当なものだつた

管である。然し女性を対照とし、女性に出家得道を勧める二人比丘尼創作の時に当っては、特に仏教的側面が強く出て来たのは当然であり、それ故に虎御前出家の物語に構想が集中的に求められたのも当然の事であった。

そこで彼はその物語を精読し、その要所々々の効果を完全に保存するように気を配りながら（それは彼が曾我物語から得た感激を、そのまゝ自分の新作に移植する為に必要と考えられた事であった。）徐々に須田弥兵衛の妻の物語に仕組んで行った。更に効果を強める為に一休骸骨や九相詩の趣向を取り入れ、最後の法語は、老比丘尼を創造して、一休二人比丘尼の方式で行く事にした。こうして彼は思うまゝに脚色の才を揮い、法語の箇所には情熱を傾け尽くして済度の筆を走らせた。彼の創作意図はこゝに達成され、満足した彼は、遂に主人公を自分が体験した最高の悟りの世界にまで導いて行つてしまつた……。

これは多分に想像をまじえた私案であるが、こうした古典や先行作品に密着した創作は、正三に於ては他にも見られるのであり、それは、卒塔婆小町を改作したおもかげ小町であるが、その改作態度の細心且つ大胆で、しかも能う限り原典の効果を失うまいとする態度は、よく二人比丘尼の場合と似通つていると思ふのである。

正三のみならず、古典に何らかの形で密着している作品は仮名草子には多いのである。（勿論仮名草子のみに限つた事ではない。）ただその方法は、個々の作家によつて違つている。とにかく此の時代にあつては、古典は現代よりもはるかに信頼された、生きた存在だつたと思われる。文運未だ興隆せず、創作力が貧困だつた時代でもあつた事であるから、新作も古典の修正乃至補足という形で現れ

る事が多かつたのであろうか。だから当時の新作の新しさは、その修正補足の中に探られねばならぬ事が多いと思ふ。

二人比丘尼の場合は、殆ど全面的に曾我物語を採用しながら、九相詩や骸骨を用いた所に大きな特色が認められる。今日、一般に九相詩や骸骨による部分のみが注目を浴びているのも理由のない事ではないと思ふ。それはその部分だけが異様な迫力を持つてゐる等という事よりも、二人比丘尼に於ける、曾我物語の修正補足が、実にそこにある事が一般に感じられてゐるからであつて、そこに我々はなにがしかの新しさを認めて来たわけである。それが何故新しさを感じさせるかというなら、それは人間は虎御前のように、綺麗事だけでは出家得道出来るものではないとする、正三の曾我物語批判から來ているからだと答えて良いのではないだろうか。

換言すれば、それは正三に於ける人間不信の声であり、中世的人間像の否認の上に立つた新しい人間観の表明であつたかも知れない。然しこゝまで來れば問題は自ら別であり、機会をあらためて考察して見たいと思つてゐる。

—大阪大学大学院学生—